

あなたにあいたくて生まれてきた詩



詩を選んだ人 宗 左近

あなたにあいたくて生まれてきた詩



詩を選んだ人

宗左近

あなたにあいたくて
生まれてきた詩

詩を選んだ人・宗 左 近



発行 2000年11月30日

5刷 2001年2月20日

発行者 佐藤隆信

発行所 株式会社新潮社

〒162-8711 東京都新宿区矢来町71

電話 03(3266)5411(編集部) 03(3266)5111(読者係)

印刷所 大日本印刷株式会社

製本所 株式会社大進堂

©Sakon Sô 2000, Printed in Japan

ISBN4-10-420902-3 C0092

乱丁・落丁本は、ご面倒ですが小社読者係宛お送り
下さい。送料小社負担にてお取替えいたします。

価格はカバーに表示してあります。

著作権者で消息不明の方を探しています。お気付の方は編集部へご連絡下さい。

おげんきにいますか

宗 左 近

今日は、みなさん。ご機嫌いかがですか。

この「今日は」という音も文字も、じつに好いですね。その声を、口から出しても耳から聞いても、それだけで、何となくいい気分になります。うん、生きているんだなあ、という実感が生れます。

人類が地球に出現したのは、二百万年前ですか、三百万年前ですか。まだ、夢さえもこの世に生れなかったのではないかと思われる、じつにじつに遙かな昔ですね。初めての男と女が青春をむかえました。目のなかの日の輝きを見つめあいました。そして、同時に叫びました、「今日は」と。

地球の心臓と人類の心臓が脈動をともにしたのです。その喜びが声となって噴き出したのです。そして、その声とともに二人はかけよって、強く抱きあいました。そこから、人類ではなくて人間の第一歩が始まりました。

この「今日は」こそが、詩です。唐突だと思いませんか。飛躍だとお感じになりますか。でも、そうではないのです。お信じにならないかたは、ぜひ、本書をごらん下さい。

この『あなたにいたくて生まれてきた詩』は、二十一世紀にむけて届ける二十世紀からの、いいえ、最初の人類の子孫の人間からの、「今日は」なのです。

本書に、当時小学一年生の藤根優子さんの四行作品「あさがおさん」があります。書き流しにすると、次の通りです。

「あさがおさん／おげんきにいますか／はい／いますよ」。

冬の寒さのなかに置かれている朝顔の種子に、作者は呼びかけるのです。「おげんきにいますか」と。つまり、「今日は」と。すると、種子のなかから声が返ってくるのです、「はい、いますよ」と。つまり、「今日は」と。

この人間の自然への呼びかけと、この自然の人間への語りかけ、これこそが詩です。これ以外に詩はありません。

本書に集められた八十四篇は、その意味でのまぎれもない詩の、「おげんきにいますか」の訴えかけに答えて、すこやかに美しく咲き出た朝顔の花です。そして、その時、作者の経歴と年齢はいつさい消えます。みんな、藤根優子さんと同じ小学一年生そのものです。

つまり、これは、二十世紀の日本の「あさがおさん」なのです。それは、まだ種子かもしれない。しかし、二十一世紀の世界に爽やかな未来を花開くに違いない赤や青や白のじつに爽やかな詩の群れなのです。

みなさん、どうか、見つめて下さい。そして、「おげんきにいますか」と声をかけて下さい。

あなたにあいたくて生まれてきた詩・目次

おげんきにいますか 宗左近 1

I

相違	川崎洋	10
星	吉野弘	12
結婚	新川和江	14
花	清岡卓行	16
絶望	竹中郁	18
闇	杉山平一	20
倒さの草	小山正孝	22
ひかりの塩	安西均	24
星のない夜	及川均	26
夕焼け	黒田三郎	28
跡	高橋順子	30
きりん	天野忠	32

II

東雲	尾形亀之助	36
空のエスキス	18	霧見忠良 38
ライフ・ストーリー		大岡信 40
息を殺せ	八木重吉	42
火と藍	中江俊夫	44
断章	吉岡実	46
巴里祭	嵯峨信之	48
(無題)	(作者不詳)	50
他人の空	飯島耕一	52
鳩	高橋睦郎	54
家族	北野和博	56
林檎の香	那珂太郎	58

III

風 中村稔 62

あげます 谷川俊太郎 64

お父さん 山上岳彦 66

四丁目の犬 野口雨情 68

ママ 田中大輔 70

さかな たきぐちよしお 72

黒部ダム まつざきやす子 74

じかん 白鳥創 76

花に関する15のつぶやき 花田英三 78

夜 小口百代 80

みかん まど・みちお 82

おとうさんの木 山田まき子 84

IV

木はなが 松田崇 88

空 小野久子 90

先生のおい 曾和太介 92

ママ すえまつまりこ 94

なみだ 松本可奈子 96

お姫さまごっこ 上原あゆみ 98

おとうちゃん大好き 小沢たかゆき 100

えりなのプロフィール 桑原滝弥 102

あさがお 金子みすゞ 104

槍投 村野四郎 106

鳴く虫 高橋元吉 108

ぼくのおかあさんは

おふろのかんごふさん

さとうゆうすけ

V

- ふる郷は 吉田一穂 114
 雲は雲のままに流れ 工藤直子 116
 先生 林亮 118
 会社の人事 中桐雅夫 120
 風のうた 安水稔和 122
 ヘリコプター 笠松美代 124
 灰 はしもと雅美 126
 かぞく 山本隆 128
 おとなのいない町 石川玲子 130
 希望・勇氣 玉代勢章 132
 ポール 蛭田浩生 134
 あさがおさん 藤根優子 136

VI

- なんばんめ 熊田亘 140
 娘 中江清 142
 根 堀部泰子 144
 さくら 酒井健司 146
 散る 伊藤美佐子 148
 枕木 林政子 150
 おばあちゃんしんじやった 下田大道 152
 花火 川畑宏平 154
 あさがお 平岩亜妃子 156
 ゆでたまご かしまじゅんいち 158
 少年時代 澤田保子 160
 じいちゃんの耳 中川さや子 162

VII

シアワセ 本多陽子 166

丁度よい 良寛 168

(連句抄) 清水哲男 三木卓 高橋順子 170

声 会田綱雄 172

虫 池原綾子 174

池 (pond) 白石かずこ 176

ふるさとは 中島和子 178

くちぐせ 島田陽子 180

すいめん 竹谷育実 182

ひぐらし 宮本苑生 184

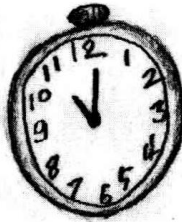
切株や 加藤郁平 186

泣きながら 宮沢賢治 188

あなたに
あいたく
て生まれ
てきた詩

装画・扉カット 風間 完
装 幀 新潮社装幀室

I



相違

川崎 洋

なぜ木の枝から魚が採れないのかしら？
陽はふんだんにあるんだし

あの なにかしら昔から続いていて

それがまた未来へつながっていくものは
それは

海だって

木の枝だって

同じじゃないか

海や木の枝

君達の間の相違とは一体

どのようなものなんだ？

魚はどうして

芥子色のやみどり色があるのか？

葱ねぎのあの青色と白色の夢みがちな区別は

誰かの手がナイフでそこを

すばりと切り離つ為にだけあるのか？

この作品は、いわば幼児の質問です。「海や木の枝」の相違は何か、というのですから。

しかし、読者は質問に答えなければならない。そうなる
と、やさしくないのです。

とくに「葱のあの青色と白色」の区別は何のためにあるのか、というところは難しい。ただし、作者はヒントを与えている。それは「夢みがちな」という言葉です。それを頼りに読み開いてみれば、葱の見ている夢の流れが青色から白色になっている、ということではないでしょうか。

この夢の流れとは、「昔から続いていて」、「また未来へつながっていくもの」です。じつに大きな生命の流れといってもいい。それは、海にも木の枝にも流れているのです。誰かの手のナイフによって切り離せるようなものではないのです。

旧年を送り新年を迎える祈りとして、この作品を読みた
いと思います。昔からの夢は美しい。それは続くのです。

川崎 洋 [1930-] *Kawasaki Hiroshi*

東京生れ。本作品は『川崎洋詩集』（国文社）より。

あまりに明るく

すべてが見えすぎる昼。

かえって

みずからを無^なみするものが
空にはある。

有能であるよりほかに

ありようのない

サラリーマンの一人は

職場で

心を

無用な心を

昼の星のようにかくして

一日を耐える。

夜は暗さです。多くのものを陰かげしてくれます。だが、そのために、かえって見えてくるものがあります。たとえば、空の星、人間の心。

昼は明るさです。多くのものをあばきだしてくれます。だが、そのために、かえって見えなくなってくるものがあります。たとえば、空の星、人間の心。

この作品『星』は、その「空の星」と「人間の心」を、等符号で結びつけています。読んで、なるほどなあ、と誰もが思います。何でもないようですが、これは発見です。そして、発見こそが詩、なのです。

正月がすぎて職場に戻った読者のほとんどは、この作品に強く同感なさるのではないでしょうか。それでこそ、「人間の心」をお持ちです。それは、つまりは「星の星」は、いくぶん疼くはずです。

冬は大気の冴さえている季節。見えない「星の星」も見えてきますね。

吉野 弘 [1926~] *Yoshino Hiroshi*

酒田市生れ。本作品は『吉野弘全詩集』（青土社）より。

呼びつづけていたような気がする
呼ばれつづけていたような気がする
こどもの頃から

いいえ 生れるずっと前から

そして今 あなたが振り返り

そして今 「はい」とわたしが答えたのだ

海は盛りあがり 山は声をあげ

乳と蜜はふたりの足もとをめぐって流れた

ひとりではわからなかったことが

ふたりではわけなく解ける この不思議さ
たとえば花が咲く意味について

はやくも わたしたちは知って頬を染める
わたしたち自身が花であることを

ふたりで咲いた はじめての朝